

追悼 松本健一さん

アジア・太平洋賞の選考委員を長く務めた評論家の松本健一さんが2014年11月27日、お亡くなりになりました。68歳。同賞の選考委員仲間の渡辺利夫・拓殖大学総長と田中明彦・国際協力機構理事、それにアジア調査会専務理事・事務局長として松本さんと深い交流があった清水幹夫さんに追悼の文章をいただきました。

貴兄はもう十分に

仕事をやり遂げましたよ

拓殖大学総長 渡辺 利夫

今年の一月に奉職する大学の同僚の遠藤浩一さんが急逝、十一月に入つて松本健一さんの訃報が入った。遠藤さんは五五歳、松本さんは六八歳、七五歳で存命の私からすれば余りにも早い。優れた者から去っていくのか、という無念の思いである。

九月一八日、毎日新聞主筆の伊藤芳明さんの部屋でアジア調査会のアジア・太平洋賞の最終審査会が開かれ、そこではいつも昂揚気味に話すあの松本節は相変わらずであった。特段、体調が悪いようにはみえなかった。逝去の報せを受けて振り返れば、顔色が少し悪かったかなという気も

しないではないが。

一〇年ほど前のことであろうか、松本さんは痔の病で苦勞しておられた。何とこれが無痛で、気づかぬ内に大量出血してある駅で倒れ込み、近くの病院に搬送されて事無きを得たと、後日、本人から聞かされた。当時、同病—といっても私の方は椅子にも座れないほどの痛みだったが—であった私は、松本さんに深く同情しながら、へえ、病と—いうものにはいろんなものがあるもんだねえ—などと語り合つたことを思い起こす。松本さんの顔色があまりよくなかつたのはその頃からのことで、九月に会つた時にも特に気にならなかつたのは、そういうことがあつたからだったとも思う。

聞けばこの最終審査会には、胃癌で入院している都内の病院から「この日だけは何とか」と抜け出してお席だったという。前夜あたりに電話でもしてくれて、明日は渡辺さん、仁せるよ」とどうしていつてくれなかつたものか。松本さんとは、もう二〇年以上の付き合いになるだろうか。文藝春秋の当時の保守論壇誌「諸君！」などで何度か対談したりした。大変に多作な研究者であつたが、出版の度に律儀にも本を送付してくれるものだから、私の書棚には



2013年9月11日に開かれた第25回アジア・太平洋賞の最終選考委員会で議論する左から渡辺利夫・拓殖大学総長、松本健一氏、栗山尚一・アジア調査会会長、田中明彦・国際協力機構理事長、伊藤芳明・毎日新聞社主筆（東京・一ツ橋の毎日新聞社で）

二〇冊近い松本さんの著作が並んでいる。代表作が全五巻の『評伝 北一輝』である。処女作『若き北一輝―恋と詩歌と革命』以来、研鑽を重ねてきた松本さんの北一輝研究の集大成である。名作である。多くの知識人にそう受けとめられたのであろう。この作品によって松

本さんは司馬遼太郎賞と毎日出版文化賞の同時受賞となった。高い評価が数多くの紙誌にあふれた。私がいまさら、ここで云々するには及ばない。

私が松本さんよくやってくれたな、と思わされたのは『近代アジア精神史の試み』である。実はといえば、当時も審査委員をつとめていた私がアジア太平洋賞大賞の受賞作として推薦したのもこの著作であった。アジアの興隆をもたらしたものの思想的淵源を探ろうという松本さんの思索の旅の本である。そもそもアジアの現代を形づくった思想と精神はいかなるものであったか。まずもって論じられるべきこのテーマへの取り組みを、われわれは先送りしてきたのではないか。そういう自省が当時の私には強くあった。この面での知的空隙を埋めてくれる博引傍証の著作として、本書には私の目を開かせてくれるものがあつた。

アジアの自己認識の出發が西欧への抵抗にあつたこと、しかしアジアの抵抗は西欧近代の精神（個人主義とナショナリズム）を自家薬籠中のものとすることによってしか実現しえなかつたこと、したがって例えば日本の近代化はアジアの自己否定への契機を含んでいたこと、しかし日本の近代化は西欧近代を超越することによりアジア解放の遠因となつたこと、などをアジア政治指導者の言説を実証のベースにして豊饒に論評した著作であつた。

以来、私としては松本さんは自分の思想の盟友の一人の

ように勝手に思い込んできた。松本さんも、ご自身の主宰するシンポジウムなどに私をよく引っぱり出してくれたのだから、松本さんも私のことを多少は盟友らしき者だと感じていたのかもしれない。

人生をひたすら原稿用紙に向かいつづけることに賭けた松本さんである。十分な仕事をしてきたのだから、もう目を醒ますことなく安らかに眠っていてもいいのではないかと、この追悼の原稿を認めながら、そう思う。